庄野潤三と十和田操（三）

―未発表の庄野書簡39通をめぐって―

Junzo Shono and Misao Towada (3) : The Newfound Letters of Junzo Shono

鷺　只　雄
SAGI Tadao

はじめに

私は先に二つの拙稿「庄野潤三と十和田操（一）― 未発表の庄野書簡をめぐって ―」（都留文科大学国語国文学会「国文学論考」38号、02・3・15）「同上」（二）（「都留文科大学研究紀要」58集03・3・20）で、新しく入手した新出の十和田操宛庄野潤三書簡三十九通を、可能な限り忠実に再現することを目指して翻刻紹介した。

その際、紙数の制約から二回に分載し、また、翻刻のみでその内容については論じる余裕がなかったので、ここで扱うことにしておきたい。

庄野氏には十和田①の没後にその交友を追想した「十和田さんの手紙」②（昭53・8「海」）と題する一文があり、これは表題が示す通り、回想の主要な点は本と十和田の手紙から引用したもので、本稿で翻刻した三十九通と関わる書簡も四通ほどある。従って本来からすれば、それらの対応する書簡もここに引用対比して吟味することも厳密には必要であろうが、何分引用が部分的・断片的であるために、現状としては全体としての統一や全円的理解に障害乃至困難があるところから、その吟味についてはここではよして、「十和田さんの手紙」の内容については大いに利用させていただくことで稿を進めることにしたい。

猶、本稿で十和田論の対象とした作品は次の通りである。

奥野健男編『十和田操作品集』（昭45・3・20　冬樹社）十和田操「回顧詩紋帖」（昭32・9・15～34・12・15「濃飛人」21回）十和田操「菌と母と」他17篇③（昭35・4・25～49・5・25「春夏秋冬」）

一

まず庄野氏と十和田との知りあいとなるきっかけは何であったのか、というところから始めよう。

庄野氏がそれまでの新制高校の教師をやめて朝日放送に入社したのが昭和二十六年の九月。折柄、民間経営のラジオ放送が開始された時で、大阪では毎日新聞社の新日本放送が九月一日から、朝日新聞社の朝日放送が十一月十一日から放送を開始し、氏は教養番組の制作を担当した。同僚には帝塚山学院の出身で、同じく後に芥川賞を受賞し、作家となった阪田寛夫がいた。

開局早々ということで少ない人数で多くの番組を分担していたが、その一つに「掌小説」という十分間の朗読番組があり、その原稿依頼という仕事を通じて十和田と知合った。④

それがいつ頃からであるかは不明だが、翻刻した書簡の1～4は全て「掌小説」の原稿依頼（一通のみ原稿受領の礼状）であり、それらは昭和二十八年七月から翌年七月までのものである（翌三十年八月には退社して作家生活に入っている）ところから判断して、昭和二十八年前後に知合って、実際に面識を得たのは氏が昭和二十八年九月に東京支社へ転勤になってからであろうと推定され、以後二人の仲は急速に深まる。

庄野氏は「掌小説」の原稿を依頼するにあたって一つの原則を貫いていたようで、文壇に出ては見たものの、あまり注文が来なくて生活に難儀しているような作家（例えばブームになる前の木山捷平）に見当をつけて原稿を依頼していたようである。ところが、十和田は一旦勤めた時事新報社が解散して失業したことは確かであるが、翌昭和十二年九月から朝日新聞社に勤務して生活的には安定した状態であることを知らなかった。

のみならず、皮肉なことに、十和田の勤める朝日新聞社は庄野氏の会社の親会社であり、毎日の昼食には有楽町の朝日新聞本社の社員食堂へ「米食券」をもって食べに行くという関係になった。

社員食堂ではよく一緒になった。食事の盆を持って空いた席を探していると、十和田が見つけて、立ち上がり、「こっちだ、こっちだ」というふうに遠くから手招きをして呼んでくれる。食事をし、コーヒーを飲み、おしゃべりをするというのがいつものコースであった。

しかも、そのおしゃべりというのが十和田の独壇場であって、無類の話好きの話上手で聞いている者を飽かすことなく、好きな煙草の火を絶やすことなく（いわゆるチェーン・スモーカーであったようで、「生理」〔昭23・7「若草」〕には毎月のタバコ代が、月給の半分になるところから発する夫婦の問答が記されている）しゃべり続けるというパターンであったようだ。

この楽しい「社めし」時代は、一年半で終りとなる。十和田が昭和三十年三月に定年退職となったからである⑤。しかし、同年八月に庄野氏も会社をやめたところから、今度は家族ぐるみの交際が深まっていくわけで、それについては翻刻の書簡が語る通りである。

知合ったきっかけとその時期についてはこのへんで打切って先へ

進むことにしたい。

二

十和田操論というものはこれまで殆どない中に、伊藤整は十和田の非常に早い発見者で戦前に既に「十和田操の芸術」（昭16・3・15「現代文学」）を書いて、その文学が「独創的」である所以を明らかにした。そのあとを受けて庄野氏の「十和田操覚え書」（『十和田操作品集』所収　昭45・3・20　冬樹社　539～558頁）が書かれ、この二篇が十和田論の双璧をなす。

以下には庄野氏の論考の主要な論点を紹介することからはじめることにしたい。ただし、あらかじめおことわりしておかなければならないのは、紙数の制約から具体的な指摘の引用を最小限、あるいは縮約せざるをえなかった点で、正確には原文について見られることをお願いしておきたい。

一〈不思議な才能〉

「河豚提灯と犬張子」（昭7・12「新科学的文芸」）にでてくる「トンブクラ」（十和田の郷里岐阜で幼児に結うマゲのこと）は

一歳二歳は　トンブクラ
三歳四歳は　トンブクリ
五つ　　トンブクル
六つ　　トンブクレ
七つ八つは　トンブクロ
ああラリルレロのロレルリラ、
アワ、ツボ、トンボ、オタボコボン。

これは〈「ただの語呂合わせというのではない。作曲家がすぐれたモチーフを思い浮べるような、偶然の働きといった気味がある。それは美しく、たくみで、芸というものを感じさせる。」〉

二〈永遠につながる夢〉

「二階のない学校」（昭15・1「文芸汎論」）の中に杉家の大きな柱時計のことが出てきて、その音はこんなふうに聞える。

エー　バァーン　リッコツ
　　ガァーン　リッコ
　ピガァーン　リッコツ
　ズゴォーン　リッコ
　ズヴォーン　リッコツ
　　ポォーン　リッコ
エー　リッコツ　リッコツ
　ドリッコツ　リッコ

時計は六時を打ったのだが、十和田少年の耳には〈こんな風な、精緻でゆたかな、たのしい音色と拍子の組合せとなって聞え、書きとめられる。五線譜の上のお玉杓子のように。／それは柱時計の音でありながら、柱時計の音を超えたもの――永遠につながるものを含んだ、ひとつの夢である。〉

そして十和田の理解者であった伊藤整が「十和田操の芸術」（前出）の中でこの柱時計の音の部分をとりあげて〈「この音の模写は実に見事である。読者はこの引用文のところを、もう一度ゆっくり読んで頂きたい。（中略）ある種の人たちは、こういう描写をふざけていると思うかも知れない。こういう写生は、日本のように写生の発達した文学の国でもほとんど誰もやっていないように思う。白

秋の詩や、故平戸廉吉の詩に、ローマ字を使った音の写生があるが、散文では、この作家の外に私は今思い出せない。このような文章をふんと笑ってしまえる人はきっと多いと思うが、私は日本の文学がもっと美しくなり、幅や余裕をもち、厚みを持つために、このような部分が散文には必要であり、いや必然であることよりも何よりもこの美しさに気づかない人の方を感受力に欠けていると思う外ないのである」〉と断じている。

三〈精霊の宿り〉

ガミガム、ガミガム戸を叩き、
「風じゃないよ、風ではありませんよ」と呼んだ。（「戸の前で」〔昭26・7「小説新潮」〕）

〈例えばこんな風に、いきなり最初の行から出て来ることもある。／古くなってかしいでいるので、なかなか一息にあかない戸である。戦争中に爆弾の地ひびきで度々ゆすぶられたので、桟はゆるんでいる。かすかな風のそよぎにも、大げさに音を立てる、そういう曰くつきの戸である。

ゴト、ゴト、ゴトンと呟き
ビリ、ビリ、ビリと震え
シャガ、シャガ、ジャガと鳴る

最初のガミガムで先ずびっくりさせておいて、すぐそのあとに次が待っている。油断も隙もない、と云った感じであり、実際、防ぎようはないのである。（中略）

古くなって、ひらきにくい硝子戸を叩くところを小説に書いたのは、十和田さんが世界で最初の人ではあるまい。だが、誰がいったい／「ガミガム、ガミガム」／というような言葉を考えただろう。／これはもう擬声語（オノマトペ）というものではない。（中略）この人は、手軽にありきたりの擬声語を用いて事を済ますのではない。手間を省くのではなくて、反対に手間をかけるのである。ガミガム、ガミガムは、おぼろ月夜に古ぼけた玄関の戸をそっと叩く音には違いないが、それは音というよりももっとこまやかなものであり、詩行のひらめきに近い性質を持っている。／そのひとことに精霊が宿っている。〉

四〈独創的な言葉の発見〉

〈十和田は自分の生活から、生活感情のかたまりの中から、屡々こうして精霊の働きを持った言葉を見つけ出して来る。それは必ずしも何かの音色やひびきを表す言葉とは限らなくて、「戸の前で」に出て来る「オケチョビン」のように、子供の愛称である場合もある。

この戸を叩くといつも真っ先に飛び出してくるのは、お化粧瓶のように小っちゃくて、足を片方いためているので、びっこをひいて、ケチョケチョ歩き廻っている二男坊である。

男の子にお化粧瓶という名前を考えるところが、既に独創的である。この二男坊がどういうわけでそんなことになったか、分らないが、片方の足をいためている。しかし、元気な子供らしい。夕方、お父さんが帰るのを待っていて、玄関の戸が鳴ると、すぐに飛び出して行く。／「お父ちゃんでしか」／と聞く。／こちらが、お父ちゃんではありませんよ、と云っても、／「そうでちか」／と云って、大きな下駄を引っかけて出て来て、鍵を外す。

あきにくい戸をお父さんが外からあけると、わっと云って中から

驚かす。そして、宿引きの番頭みたいに、お父さんのくたびれた古鞄を、／「よいしょ、よいしょ」／と家の中へ持って行ってしまう。

ディズニイの漫画をみているようで、本当にお化粧瓶が玄関のたたきからお父さんの鞄を持って、畳の上へ上がって行く。耳もとで音楽がひびく。それは、諧謔味があって、浮き浮きさせるような曲でありながら、その底にどこかしみじみとしたものを湛えていなければならない。

そんな気持にさせるのは、「オケチョビン」というひとことが、単なる思いつきでなくて、この物語の中でいかにも適切な用い方をされていて、この一篇を芸術味の濃いものに仕上げる上に無くてはならない要の役割を果しているからであろう。（中略）その子が片方の足が悪くて、びっこをひいているというのだから、親として一層いとしい心持がするだろう。その上、お父さんがからかって、／「オケチョビンは、どこからこの家へ来たの」／と聞くと、／「フンドシのお父ちゃんから生まれてきたんだよ」／と元気にやり返すのだから、孫のように可愛く思ったとしても無理からぬことである。この子は、父親と一緒に銭湯へ行って、お母さんに、／「お父うちゃんが、字の書いてない手拭に紐の二つついたので、おちんちんをかくしているの、あれなあに」／と聞くような利発な子で、その観察は精妙というべきである。

だから、父親にオケチョビンちゃんと云われる分にはまだいいが、ただのオケチョビンと呼び捨てにされると、「フンドシい」と呼び返す、そんな頼もしいところのある子だ。〉

五〈生きてゆくのに一番大切なもの〉

〈ガミガムと戸を叩いて帰って来た主人から、四万円ほど儲けそこなった話の一部始終を聞く。それは或る本が出版されるのに、原稿の整理を特別念入りにして貰った労力に対して、お礼の気持として是非収めて頂きたいと云って、本の著者から出された封筒の中味が、その厚みからしておそらくそのくらいあったろうというのであるが、そうして、いまここでこいつを貰えば、二十何年前に新調して以来、裏返したり、染め直したりして、未だに着用しているオーバアも、ひとつ新しいのを買い直せるのだがと、欲しくて手の出そうな封筒であったが、どうしてもそれを貰うわけにはゆかない理由を述べて、到頭、夕飯をご馳走になっただけで帰って来た。

全く惜しいことをしたもんだと、道々思いながら帰って来たのだが、お母ちゃんの意見はどうかねと聞かれて、彼女はこう答える。

「でも、よかったわ、いいことなさったと思うわ、あなたのあのオーバアーは、そばで見たり、日向で見るとがっかりするけれど、曇った日や遠目に見ると、昔のものは、品や仕立てがいいからとても、ハイカラな立派なオーバアに見えて、あなたに、一番あれがよく似合ってよ」

謝礼の封筒を馬鹿正直に断り通して、惜しいことしたと悔やみながら帰って来る主人もえらい人であるが、こう云って慰める細君もなかなか立派ではないか。そこに何とも云えないおかしみがあるのを尊重する。あわれみとおかしみのまざり合ったものこそ、人間のいちばんの宝ではないだろうか。

お礼は来なかったけれども、オーバアはやっぱりもとの古のままであるとしても、夜ふけの夫婦の会話は、人が生きてゆくのに何がいちばん大切であるかをはっきりと語っている。そうして、この瞬間、神の祝福は路地の一家の上にあますところなく注がれていたに

違いない。〉

六〈母譲りの話好き〉

十和田の話好きは、本人によると母譲りという。

「ゴーゴリのお母さんが話好きだったように、私の母がよく田舎のことを話した」

〈たとえば、「やせ馬のがけっと落ち」ということを云う。「がけっと」とは崖のことで、やせ馬が「がけっと」から落ちると「毀れてばらばらになって、骨の折ればかりになる。ここにもあそこにも、折れが、折れが、折れがという有様で、つまり、俺が、俺がと言って、どこへでも出しゃばる人間のことを「やせ馬のがけっと落ち」という。小さい子供の時代から、お母さんがよくこういう話をしてくれた。（中略）お父さんとお母さんの生家は、盆踊りで有名な城下町の郡上八幡から二里ほど山奥へ入ったところにある。

「……母のお噺はこの市で僕の外には誰もまだきいたこともなければ、どんな本にも書いてないものばかりのような気がする。そして母はそういう昔噺なら無数に知っている。だから二度と同じお噺を繰返すことは滅多にない」

いいお母さんを持ったものだ。今の世の中では、少年少女のための世界の名作がいっぱい入った全集を買ってくれる母親はいても、自分のお母さんから聞き伝えた昔噺をしてくれるような母親はいるだろうか。たとえそんな母親がいたとしても、本当に珍しいのではないか。

だんだんと日本の味というものが薄れてゆく。アンデルセンは知っていても、在所言葉で語られる昔噺を一つも知らないし、子供に話してやることも出来ないお母さんばかりになってしまったとしたら、さびしい。〉

七〈母の話し振り〉

〈十和田少年のお母さんの話し振りに注目しよう。

「ふん、で見るとさえがじゃよ。それは足の一本折れた一羽の雀ん子じゃったん。足ははじめから折れちょったもんか、落ちたで折れたもんか、そいちゃ判らんが、おっそろしゅう痛そうにお爺さんの顔見上げて鳴くん。黄ない口ばしをこう精一杯に手前の体がかくれてしまうほど大きく、口ばっかりのよな顔して」話の中身、筋というのは無論、大切ではあるが、話を進めてゆくその段取り、つなぎ、間というものがもっと重要なものとなって来る。

「で見るとさえがじゃよ」／というようなところや、「そいちゃ判らんが」／というようなところに、云うに云われぬよさがある。早く先を聞きたいと思う子供でも、そんなまどろっこしいような話しぶりに面白さがあって、それをお話からすっかり取り除いてしまうわけにはゆかないことを諒解しているのである。〉

八〈興の乗った話はどこまでも追いつめ、行きづまると話を変える〉

〈「トリストラム・シャンディの生活と意見」「センチメンタル・ジャーニー」の作者、英国十八世紀の異色ある作家ロレンス・スターンの話が出た時、十和田さんはこう云った。それは、「有楽街の宿直室」という作品について話している最中であった。

「スターンのおしゃべりと同じなんです。あれを真似したわけじゃないけど。つまり感興の乗ったのを逃がさずに、どこまでも追って行き、行詰ると、また話を変える。手法というわけではない。ただ、話というものはこういうものだという――自然の話はこういう具合のものだという考えがあって、それで小説を書いてみようとし

たわけです。」〉

九〈話の骨法―幼児に母から植え付けられる〉

〈十和田さんは、話の内容は無論、自分の気に入ったことでないと書かないが、その話をするのに、おもむろに道行きをたのしむ、語り口そのものに工夫をこらすという趣があるのは（それが十和田さんの文学の大きな魅力となっているのだが）、もしかすると、小さい時分に在所言葉でせかず慌てず昔噺を聞かせてくれたお母さんに負うところがあるのではないか。

云わば話を聞かせる骨法というものを、幼な心にしっかりと植つけられたのかも知れない。〉

十〈幼児からの夜がたり体験 ― 花開く〉

〈また、十和田少年はお父さんとお母さんの郷里へよく行った。お父さんとお母さんの生れた村は、大体同じところにあって、どちらも庄屋のような家であった。夏休みに行った時など、夜、年上の従兄たちが集まって、いろんな話をする。まだ年端のゆかぬ子に聞かせては都合の悪いようなことでも、話をする。従兄ばかりではない。面白い小母さんがいて、／「昨夜、やどかりが来てね」／というようなことを聞かせてくれる。

やどかりというのは、娘さんのいる家へ夜中こっそり忍び込んで来る若い衆のことである。教育的見地から云うと、由々しい問題であるかも知れないが、それほど心配は無かったらしい。十和田さんは、公開をはばかるような夏の夜がたりを、後日、その詩嚢を肥やすために心のうちに収めておいた。（中略）

これら幼き日の、父母の郷里で見聞したいろんな情景の断片がずっと頭の中にあって、いつかこういうものを書いてみようというので書いた。それが「絣」や「有楽街の宿直室」である。（中略）

土俗にまつわる哀れ深い話、滑稽で野放図な、野趣に富む話が、生き生きと描かれる。しかも、舞台は、郷里の村を遠く離れた東京の新聞社の宿直室である。

そこには各部の宿直に当たった者が、めいめいのベッドの上に横になったままで、話をしている。話好きの者がいて、これに合槌を打つ者もいるし、いちいち駄洒落を飛ばして茶化す者もいる。途中で眠ってしまう者もいる。おしまいには、気が付いてみると、起きているのはしゃべっていた当人ひとりきりになっていることもある。

そういう都会の生活者の雰囲気が巧に捉えられているために、遠い山里のむかしの話が夢幻の美しさを帯びて来るのだろうか。〉

十一〈親だわけと村長の肖像写真〉

〈「蝦」という小説に出て来る十和田さんのお父さんの風格、お父さんとお母さんのやり取りの面白さについて書いておきたい気がする。

この老夫婦は、飛騨と美濃の堺にあるふるさとに二人きりで余生を送っている。或る日、お父さんは、東京にいる息子に手紙を書き出したが、墨がよく乗って、いくらでも書ける。到頭、四日間も書き続けてしまった。

「こんな長いものを書くつもりはなかった」／と云うと、縫物から目を離さないでお母さんは、／「お父つぁんの親だわけと云うものじゃに」／と云う。／親だわけとは、親馬鹿ということだろう。二人は、勝手な方へ背を向けたまま、自分のしゃべることだけ、ぶつぶつしゃべる。

ところで、手紙の冒頭にどうやらそれがこれを書くことを思いついた要件らしいものがしるされてある。それが奇抜この上ないもので、しみじみとおかしい。

村の役場の集会室に歴代村長の肖像を掲げてあるが、初代村長の写真にわしの父と間違えて写真屋がわしの顔を引き伸ばしていたことが分ったので、額縁代とも二十五両かかったが、中身だけ十両でいいから引き取ってくれるか、それがいやなら村長になって写真が無駄にならんようにしてくれと云って来た。それは、ばあさんの葬式の時にじいさんを真中にして写したものであるが、じいさんの隣りに八の字ひげを生やして坐っているわしを写真屋がじいさんだと早合点したらしい。

そこで、自分としてはその写真は要らないが、こういう写真は子が記念に持っていてこそ値打のあるものだから、もし買う気があればお前が買ったらいいと思う。

かいつまんで云えばそういうことになるが、その手紙の書きっぷりが生真面目であるだけによけいおかしい。肉親だけの持つ物悲しさのようなものが漂っている。〉

十二〈おもちゃ箱をひっくり返したような美しさ〉

〈「若いころの主人の批評に」／笑いながら十和田さんの奥さんが云う。「おもちゃ箱を引っくり返したようなものだ、何がどうなるか分らないが、面白いところがある。そういう批評をよく貰いました。まだ駆け出しのころですが」

十和田さんはおもむろに、

「その、おもちゃ箱、というところに意味があるんだよ」／ひとつひとつのおもちゃに、色彩と光沢がある。子供がそれで遊びにふける時の、あの夢中な心持がある。

どうしてこんな物がまぎれ込んだのだろうと大人がいぶかるような、変な物も中にきっとあるに違いない。だが、みんな、子供にとっては宝ものなのである。かけがえのないものなのだ。

十和田さんに取って、己の念ずる美的世界の構築ということだけが、唯一の念願ではなかったか。他人の目には、それがおもちゃ箱を引っくり返したようなものに映ったとしても、やむを得なかった。整理、整頓がないから困ると云われても、そうはゆかなかった。もし習俗の欲する通りに積んだり、並べたりしたとすれば、もう魅惑の輝きを失ってしまうのである。〉

以上、十二項目にわたって庄野氏の論点を整理要約してきたが、はじめにも指摘したように氏の十和田論はまことに知己の言というべく、鋭く深い理解と暖かい愛情に満ちた名論で、発表から三十三年経過した今でも間然するところがない。

後学の者としては誠に厄介な難物で、他に付け加えるべき意見もないのであるが、風車に立ち向かう蟷螂の斧の蛮勇をふるって二、三鶏肋を記しておきたい。

三

十和田文学を一読しての最も強烈な印象は音であり、聴覚的印象であると言ってよいと思われる。伊藤整・庄野氏が指摘された通りであるが、この音については実にさまざまのものに及び、思わぬユーモアも生み出しているわけで、両氏の指摘にも洩れたものを一

つ紹介しておきたい。

「岐阜の山奥の従兄弟の嫁さんが馬小屋の外の小便溜めを半分程またいで、子を四人産んでも未だ三十前だから二十前に着た絣の着物に紅だすきが、おかしくもない。しゅうとの方へ尻向けておしっこを落している。尻向けたって露出していないから構わない（中略）。

（ドボッケ。ドボッケ。トボケ。ドボケ〈〈〈〈）

勿体ないがね、初まりはね、雨だれがゆっくり落ちるように五、六滴こう音がしてね。それから、

（テンダイシュウ、シンゴンシュウ、テンダイシュウ、シンゴンシュウ、〈〈〈〈）

と、交互に、皮が薄くてよく響く太鼓をはげしくたたくように、いいですか、それからおしまいが又、

（ドボッケ、ドボッケ、……ドボケ、ドボ、ピッ）

と、こう蝉の啼き止りのように、ゆっくりと、小便の音は終るのだ。」（「有楽街の宿直室」昭11・9「文学生活」）

岐阜の山奥の農家、母方の伯父の家がモデルという体裁になっているのであるが、若い嫁さんが舅に尻を向けて放尿するという大らかなエロティシズムと、その小便の音の精妙な描写はまるで木魚をたたいて小用でお経をあげているようでもあって、精妙精緻を極めれば極める程、笑いを増幅するしかけになっている。

第二に指摘しておきたいのは、十和田の人間認識についてである。「判任官の子」（昭11・7「文学生活」）は、父が最下級の役人である故に、子どもや大人からあびせられる侮蔑・屈辱を淡々と描いた作品で、「二階のない学校」（昭15・1「文芸汎論」）と並んで十和田の幼時を描いた代表的な作品である。

一方、「二階のない学校」は幼少時の音への関心と赤札事件の屈辱を記し、両作には共通して一つの屈辱的な、無実の事件が語られている。

事件の骨組みだけを言えば、主人公は同級生（「判任官の子」では同年だが一級上）の女の子に待伏せして乱暴したカドで先生から犯人扱いされるが、全く身に覚えのない事で、やがて明らかになった真相によれば、乱暴された女の子は母からの追及に悪童の名を言わざるをえなくなるが、しかし仕返しを恐れて悪童の名を出すことができずに主人公の名を出したというもので、全くのヌレギヌであった。

この事件は深く彼の心を傷つけたようで、これら二つの作品に語られている他に、「回想詩紋帖(5)」にもあって忘れ難い心の傷となって彼の心に残ったことは確かである。

この事件の意味はどういうところにあるかと言えば、人間は追いつめられた場合には虚偽の証言をし、関係者を無実の罪におとしいれることも平然として出来る存在である、という恐ろしい認識である。そのために彼は当時、四〇度の熱を出し、二日も学校を休んでしまったのだから。

第三はこれとは対照的に、人間にひたすら信頼を寄せ、疑うということを知らず、全ての人々を受け容れてしまう魅力的な女性「お八重さん」を描いた「屋根裏出身」（昭13・3～6「文芸汎論」）もあって、作者の人間観の奥行きの深さを示していると思われる。

最後に「煤竹」（昭27・7「小説公園」）は一時期美濃地方の大人の間に爆発的に流行した虻凧を素材としたものであるが、凧一つ作るのに家を一、二軒建てる程の金をかける者達が続々現れたために、

破産者や自殺者が相次いだと言う。

例えば、百年竹を手に入れるために古い農家を一軒買いつぶし、凧の背景に彫刻を施し、金銀の鋲を打ち、象牙を鏤め、家紋は彫金師に純金で細工させる等々と言った具合である。

こうした浪費に翻弄される人々、あるいは無償の情熱につき動かされて家も財産も名誉も一切を蕩尽してしまう人々を描いて不思議な感動を残す。それは恐らく、作者自身にそうした傾向が人一倍強くあって破滅した生を辿ったかもしれない思い、いわば身代わりとなった人々への鎮魂の思いがそうさせているのかもしれない。

四

次に庄野書簡に見られる特徴について、四点ほどにしぼって述べておきたい。

先ず第一に、二人の交友のありよう ―― そこにおける尊敬と信頼の深さがあげられるであろう。全幅の信頼を置いた知己の間柄 ―― 稀に見る美しい人間関係を我々はそこに見出すのである。

これに該当する書簡は12・15の手紙の御礼、13のチョコレートへの御礼、ここには珍しく千寿子夫人の添書きもある。14「見ている人は見てゐるのだ」、16の帰朝報告、17の訪問して御馳走になった事への御礼、18のハイキング時の写真、23の御互いの子供の合格祈願、24の十和田の郷里郡上八幡まで出かけて行って盆踊りを見物し、すっかり気に入って三日も滞在したこと、33・34の十和田執筆の解説への御礼、などにその一端はうかがえるであろう。

次に、十和田作品に対する徹底した玩賞ぶり ―― 古い言葉に言う舐犢の愛という語がピッタリするような、手にとり、ためつすがめつしつつ感嘆の声を発するその様は正しく心からの敬愛というにふさわしい。言い換えれば、氏はそこに十和田の詩を発見し、詩人としての十和田に対面しているのである。

12の〈十和田さんのお手紙に「天高く木も高く、古い公園のやうな町が、こうばくとした地平線の見える畑の中に夢のやうにぽっかり存在してゐるやうなところ」と書かれたのを私がよんで、聞いてゐました家内と異口同音に「ほんたうにその通りだ。すごい想像力だ。やっぱり詩人の直観力はおそろしいなあ」とすっかり感心しました。本当にその通り、ピタリと御当てになったのには驚きました。〉、17の「濃飛人」に掲載中の「回顧詩紋帖」についての〈本当にいい作品で、何とも云ひやうがありません。何もかも、始めからしまひ（これまで読んだところのしまひ）まで全部いいと思ひます。名作です。〉、22の「亀の子譚」評、24の「朝顔日記」評、25の「不如意の庭」評、ことに32の「まゆ毛」についての〈「大へん面白く拝読しました。かういふものを読むと、いいなあと思ひます。何べんもお茶をいれてくれるをばさんの話が、そこまでと切れるのですが、あとに思ふままにならない人生の怖ろしさ、さびしさが残ります。／「げちゃげちゃ」／と笑った、といふところでは、シャッポを／脱ぎました。／全くこれは人の意表をつくもので、ほかの者では真似ることの出来ないものです。驚きました。」〉評と、35の「戸の前で」の〈これは傑作ですね。この一篇で、後世の読者は十和田さんを畏怖し、憧れる者がきつと出て来るだらうと思ひました。（中略）すべてをかしく、ユニークで、人の世の夢幻の美しさをたたへてゐます。かういふのが、ほかにもどつさりあるのですか？〉

とは絶賛で、余計なことだが、最後の一行にこだわってみると、あまりにも絶品、絶品と賛嘆したが故に氏はすっかりその気になってしまって、急にしぼんでしまった自らの姿に気づいて発した言葉が〈かういふのが、ほかにもどつさりあるのですか？〉――というジェラシイの言葉、敬愛する芸術家同志の中にもムクムクと頭をもたげるエゴイズム――こんなのが仰山あったらかなわんわ、けど、ないとは言えんかもしれへん、というのでおそるおそる本音が思わずとびだしたのではなかったか。

第三は、この賞揚を受けて、更に十和田文学の価値について論じ、知合いの編集者に推薦して執筆の機会・場を積極的に開拓、紹介していることで、律儀で誠実な氏の人柄を如実に示すものであると同時に、単なる友情の深さというような個人的感情を越えて、日本文学の豊かさ、深さのためにはそうでなければならぬと信じた者の潔さがあると見られるであろう。8では「二階のない学校」を新潮賞に推薦したと言い、11では、梶井基次郎を高く再評価した上で〈「二階のない学校」は、やはり梶井基次郎の残した一冊の作品集「檸檬」と同じ価値を持った作品のやうに思はれます。〉といい、12では「群像」への執筆を慫慂、更に〈他の誰にも真似出来ない古今独歩のもの〉故に〈臆せず、固くもならず、小説を書いて頂きたい〉とすすめ、14では「判任官の子」が現代日本文学全集に収録されたのを喜び、38では今度は「新潮」の編集者に話をつけて原稿依頼をさせたようである。

最後に、「夕べの雲」をはじめとする庄野作品についてのさまざまな発言を整理し、検討することによってより新しい、より深い理解が期待できるのではないかということがひとつ。それから、梶井基次郎やゴーゴリ等々の作家や作品についても同様の事が言えるであろう。

7・33の「ザボンの花」、26・28の「夕べの雲」についてはそれぞれの場面とのかかわりで、作者の痛切な肉声が、生々しく響いているわけで、その点をとり落してはならないであろう。

11の梶井基次郎、19のゴーゴリ、21のヴァージニア・ウルフへの再評価・共感は庄野文学全体との関連で今後に深めるべき課題であろう。

注

＊ 第二章の庄野氏の原文引用は必ずしも原文に忠実なものではないが、原文に照らして改めることはしなかった。

①一九〇〇・三・八～一九七八・一・一五。以下故人となった歴史上の人物については敬称省略。

②十和田操「ガンビヤ便り」（庄野潤三全集第三巻「月報3」昭和48・9・4 講談社）にも昭和32年12月4日付の庄野書簡が引用されているが約三割弱がカットされているので同様に論の参考にはしたが、吟味の対象とはしなかった。

③「春夏秋冬」の編集については十和田がその殆どをしていたと考えられるので、〈編集後記〉も参考にした。

④庄野潤三「十和田さんの手紙」（昭53・8「海」）。これらの記述については『文学交友録』（平7・3・30新潮社）、「私の履歴書」（平10・5・1～31「日本経済新聞」）にもあるが、以下煩わ

しいので記載省略。

⑤庄野潤三『文学交遊録』（前出）